

---

# 四つの国

かくれんぼ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四つの国

### 【Nコード】

N7744N

### 【作者名】

かくれんぼ

### 【あらすじ】

とある世界の、とある大陸の、とある地方に、四つの国がありました。四つの国はそれぞれ、「騎士の国」、「盾の国」、「花畑の国」、「強欲の国」と呼ばれており、中心にある「強欲の国」を他の三つの国が囲んでいました。

## （前書き）

この物語には残酷な描写、若干の性的な描写が含まれております。これらの要素に嫌悪感を持たれる方は直ちに閲覧を中止してください。また、特定の団体や人物、思想等とは一切関係ありません。

この警告を読んだ上で閲覧した方はたとえ嫌悪感を持たれたとしても文句は言えませんよ？ よろしいですか？

本当にいいのですね？ わかりました。

とある世界の、とある大陸の、とある地方に、四つの国がありました。

四つの国はそれぞれ、「騎士の国」、「盾の国」、「花畑の国」、「強欲の国」と呼ばれており、中心にある「強欲の国」を他の三つの国が囲んでいました。

「騎士の国」は勇猛果敢で、国民はとても強く、沢山の騎士がいる国です。

騎士たちは皆、国を護るために全力で戦い抜く強さを持っており、国を攻撃されたら全員で敵を打ち倒すという想いを秘めていました。そのため、彼らは敵に容赦はしません。敵を殲滅するまで戦いを止めず、彼らが出向く戦場は、彼らだけになるまで戦いが続きます。護るめには殺さなければならない、そう思っていました。

「盾の国」は堅牢で、国民は我慢強く、結束力の強い国です。しかし、「盾の国」には「騎士の国」の様な強い騎士はいませんでした。

その代わりに、国土のすべてを囲むように造られた石壁がありました。

石壁はとても高く、とても厚く、とても堅くて、外からの攻撃は一切国内には届かないほどの強い強い護りでした。

護るためには追い返さなければならない、そう思っていました。

「花畑の国」は心が優しく、国民は穏やかで、戦うことの嫌いな

国です。

「花畑の国」にも「騎士の国」の様な強い騎士はいませんでした。そして、「盾の国」の様な石壁ありませんでした。

しかし、国民はそれでも良かったのです。なぜなら、彼らの国には戦うことを忘れさせてくれる様な、素敵な花畑があつたからです。花畑には大小様々、色とりどりの花が咲き誇っていました。

護るためには花畑の素晴らしさを訴えかけよう、そう思っていました。

「強欲の国」は狡賢く、国民は狡猾で、何もかもを一人占めしようとする国です。

「強欲の国」にも「騎士の国」の様な強い騎士や、「盾の国」の様な石壁はありませんでしたが、代わりに一番厄介なものを持っていました。

それは、他の三国には追いつけないほどの『欲望』でした。

彼らの『欲望』に底は無く、毎日の様に他の三国の領土を手に入れようと考えていました。

そしてある時、とうとう「強欲の国」は欲望のままに動きだしたのです。

「強欲の国」は国民を三つの部隊に分け、それぞれを他の三国に進軍させました。

研ぎ澄まされた剣や、鋭い槍を持って侵略を始めたのです。

一番最初に戦闘が開始されたのは「騎士の国」でした。

「騎士の国」では、「強欲の国」が領土に進攻してきて直ぐに国境を警備している騎士たちが防衛戦を開始していました。

「騎士の国」の警備隊は精鋭揃いであつたため、本国からの応援部隊が到着するまでの時間を十分に稼ぐ事が出来ました。

「騎士の国」の軍隊と「強欲の国」の侵略部隊との戦闘は、「騎士の国」の一方的な殺戮となりました。

「騎士の国」の軍隊は皆屈強で、数も圧倒的でした。

「強欲の国」の侵略部隊が降参しても、彼らは一切容赦しません。自分たちの国に攻撃を仕掛けた者を生きて返そうとは思っていませんでした。

そのため、「強欲の国」の侵略部隊は一人残らず殺されました。

男は勿論、女も子供も老人も、犬や猫さえも皆殺しでした。

国境付近の大地は、「強欲の国」の侵略部隊が流した夥しい血液で赤黒く染まりました。

「強欲の国」の侵略部隊を皆殺しにした「騎士の国」の軍隊は、国を守った誇り高く精強な騎士として英雄と称えられました。

二番目に戦闘が開始されたのは「盾の国」でした。

「盾の国」では、「強欲の国」が進攻してきても直ぐには戦闘を開始しませんでした。

なぜなら、その時はまだ「強欲の国」の侵略部隊が攻撃してきていなかったからです。

「強欲の国」の侵略部隊は「盾の国」の石壁を見ても、どうやって攻撃すればよいのかわからなかったからです。

そのため、「盾の国」と「強欲の国」の戦闘はなかなか開始されませんでした。

しかし、次第に痺れを切らしてきた「強欲の国」の侵略部隊の内の一人が、軽い気持ちで小石を一つ石壁に投げつけました。

すると突然、石壁の上から豪雨の様に鋭い矢が降ってきたのです。

「強欲の国」の侵略部隊は大量の矢に貫かれて、あっと言う間に三分の一の数を失ってしまいました。

これには堪らず白旗を掲げて降参すると、ピタリと矢の雨が止まりました。

「盾の国」の戦闘は守るための戦闘です。攻撃してこない者には反撃をしません。降参をした者にも攻撃はしないのです。

「強欲の国」の侵略部隊は、その数を三分の二に減らしてすごすごと国に逃げ帰るのでした。

「盾の国」は、逃げていく「強欲の国」の侵略部隊をそのまま見逃し、追撃をかけるという事はしませんでした。

最後に戦闘が開始されたのは「花畑の国」でした。

「花畑の国」では、「強欲の国」の進行に対してやさしい気持ちで接しました。

「花畑の国」の男が「強欲の国」の侵略部隊に話しかけました。

「見てごらん、この色とりどりの花畑を。とてもきれいだゴフツ」

男は鋭い槍で胸を貫かれました。

次に若い女が口を開きました。

「今日摘んだお花よ。黄色い花がかわいいでグゲエ」

若い女は腹を殴られ気絶させられ、侵略部隊の男たちに取り囲まれて服を脱がされてしまいました。

今度は小さい男の子が言いました。

「ぼくはこの花を大好きな女の子にあげるんだ。おじさんも？るれくてしんえうお」

小さい男の子は剣で首を切られて頭を転がしてしまいました。

別の場所では小さい女の子が訊ねていました。

「好きな男の子に花冠をあげたいけど男の子が好きな花がわからないの。お兄さん、教えムゲツ」

小さい女の子は猿ぐつわをされ、建物の陰に連れて行かれました。

「花畑の国」の至る所で男が殺され、女は連れ去られていきました。子供は運が良ければ連れ去られ、運が悪ければその場で殺され

ました。

「花畑の国」の建物は、金目の物をすべて奪われて火をかけられました。

「花畑の国」の自慢であつた花畑は、侵略部隊に踏み荒らされ、男や子供の血で赤黒く染め上げられ、建物からの飛び火で燃やし尽くされました。

「花畑の国」の人間で最後に残っていたのは国の長でした。もう周りは侵略部隊に囲まれています。

国の長が言いました。

「なんでこの国の花畑の良さがわからない！ やさしい心を持つていれば争いなんて起きないのに！ 人を傷つけようとする奴は人間じゃない！」

国の長は鎌が落ちているのを見つけ、拾い上げて振りかぶります。「人間じゃない者は殺してもいいんだ！ シねエえええエエエエ！」

国の長鎌を持つて侵略部隊に襲いかかりました。

「花畑の国」の人間と「強欲の国」の侵略部隊の戦闘が初めて開始されました。

「あが」

侵略部隊の一人が放った矢が国の長の額に命中しました。

「花畑の国」と「強欲の国」の戦闘が終わりました。

「花畑の国」は滅亡したのです。

「強欲の国」は「花畑の国」の領土を奪い取り、連れ去ってきた女や子供を奴隷として扱い、さまざまな行為を強要させました。

奴隷となつた者たちを守る者は誰もいませんでした。

「強欲の国」でも多くの人間が死んでいましたが、それを悲しむものは極僅かでした。

なぜなら、国の領土が広がり、奪った金品の分け前が増え、面倒



な仕事や欲求を処理してくれる奴隷が沢山手に入っただからです。

「強欲の国」の人間は、たとえ家族や恋人が死んでも、自分の欲望が満たされれば他の事は気にしなかったのです。

その後、「騎士の国」と「盾の国」に痛い目にあわされた「強欲の国」は両国に攻めることはありませんでした。

「花畑の国」から奪ったモノで欲望は適えられていたのも攻め込まなかった理由の一つでした。

とある世界の、とある大陸の、とある地方に、三つの国がありました。

三つの国はそれぞれ、「騎士の国」、「盾の国」、「強欲の国」と呼ばれており、中心にある「強欲の国」を二つの国が挟んでいました。

三つの国はそれぞれを監視し、常に緊張感を孕んでいましたが、互いに争う事はありませんでした。

どの国も他の二国を好きではありませんでしたが、戦争のない平和な世界でした。

おしまい

（後書き）

綺麗事だけじゃ自分の命は守れないよねって話。

ちなみにこれが初投稿です。読んでくれた方がいるならば、ありがとうございます。面白かったら「面白かった」と思ってやってください。つまらなければ「もうちょっと頑張れよ」と思ってやってください。

今後何か書くかはわかりません。

ここまで読んでくれたすべての人たちに感謝を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7744n/>

---

四つの国

2010年10月10日13時36分発行